

## 胸壁浸潤型肺癌 26 例の検討

天理よろず相談所病院呼吸器内科

○岩田猛邦、網谷良一、種田和清、松原恒雄

同 放射線科

田中敬正

同 病理

小橋陽一郎

京大胸部研内科 1

倉沢卓也、小田芳郎、前川暢夫

1924 年、1932 年のパンコーストの報告以来、いわゆるパンコースト型肺癌について数多くの報告がなされてきた。今回我々は、パンコースト型肺癌を胸壁浸潤型肺癌の特殊な型と位置づけ、昭和 45 年以来我々が経験してきたパンコースト型肺癌 9 例を含む 26 例の胸壁浸潤型肺癌を検討してみた。なおパンコースト型肺癌、胸壁浸潤型肺癌の区分は加藤等の定義によった。

性別はパンコースト型で男 7 例、女 2 例、その他の胸壁浸潤型（以後胸壁型）で男 16 例、女 1 例。年齢は 43 才から 79 才、26 例中 19 例は 51 ~ 70 才であった。全員に喫煙歴があり、主訴は胸痛、肩部痛であった。注目されることはその既往歴で、胸壁型の 9 例は入院時、活動性肺結核が腫瘍と接して存在し、1 例はリニアック照射中にやはり腫瘍付近に結核病巣が出現し、排菌を認めるようになった。又、パンコースト型の 1 例においても、本外来で左上葉の肺結核の経過観察中に左肺尖部に癌が出現してきている。胸壁型では残りの 14 例中 2 例に肺結核、3 例に腫瘍と同側の胸膜炎の既往があり、気管支造影の所見をみると、パンコースト型 9 例のうち 4 例、胸壁型では造影の実施できた 11 例中 7 例に腫瘍の中核側に拡張、集束等の炎症性変化を認め、その組織は先の結核合併例と併せて 13 例中 1 例のみ腺癌で、他はすべて扁平上皮癌であり、慢性炎症と胸壁型肺癌との関係が示唆されるかもしれない。

全例の組織型は、パンコースト型で扁平上皮癌 5 例、腺癌 3 例、大細胞性未分化癌 1 例、胸壁型では扁平上皮癌 12 例、腺癌 1 例、大細胞性未分化癌 4 例で、いずれも小細胞性未分化癌例はなかった。診断方法は、パンコースト型で経皮針生検 2、縦隔鏡下生検 2、斜角筋リンパ節生検 2、細胞診 1、剖検時 2。胸壁型は経皮針生検 10、経気管支生検 3、皮下腫瘍の生検 1、細胞診 2、剖検時 1 で胸壁型は腫瘍の性格上経皮針生検が非常に有効であった。治療は、全身衰弱や活動性肺結核の 5 例を除いて 21 例にリニアック照射を実施、症例により化学療法を併用した。自覚症状はパンコースト型全例、胸壁型 14 例中 12 例で改善。胸部写真では、パンコースト型 7 例中 3 例、胸壁型 14 例中 10 例で改善。診断から死亡までの平均生存月数は両者共 7 カ月であった。

## 縦隔型肺癌の検討

長崎大学医学部第 1 外科

○内山貴堯、畦倉 薫、川原克信、中尾 丞、

大曲武征、綾部公懿、萩原盛男、中村 譲、

辻 泰邦

同 第 2 内科

奥野一裕、斉藤 厚、原 耕平

我々が経験した縦隔型肺癌は 6 例で、男性 4 例、女性 2 例で、3 / 才から 72 才にみられたが、男性例 4 例はいずれも 50 才以上であつた。主訴は、胸痛 3 例、血痰 2 例、顔面浮腫、前胸部腫脹が各々 1 例で、本症が肺末梢に発生し、縦隔へ浸潤していくことから、特異的症状が発現することを示している。胸部 X 線上、異常影はいずれも右側に存在し、前縦隔 2 例、後縦隔 3 例、中縦隔 1 例で、とくに上部後縦隔に多い傾向があつた。腫瘍陰影はいずれも比較的鮮明で、縦隔となす角度も鈍で、初診時に縦隔腫瘍と診断しても矛盾はないと思われた。気管支造影では、圧排および偏位が主所見であるが、2 例に中絶像ないしは狭窄像がみられ、本症診断にあたつては、末梢気管支の病態を把握する必要がある。気管支鏡は 2 例のみに施行されたがいずれも所見は得られなかつた。肺血管造影では、閉塞ないしは狭窄像はみられず、圧排像 5 例、ほぼ正常 1 例で診断的演技とはなり得なかつたが、気管支動脈造影を施行した 3 例中 2 例に、腫瘍に一致した hyper-vascularity, neovascularity が認められ、本法の有用性が示唆された。

喀痰細胞診は全例に陰性であつたが、針生検を施行した 4 例中 3 例に悪性細胞が検出され、本症診断に意義ある検査法と考えられた。治療としては、5 例に肺切除が行われたが、1 例は縦隔組織への浸潤が著明で試験開胸におわつた。肺切除術式は、肺葉 1 例、2 葉切除 1 例、肺葉切除 3 例で、2 例に壁側胸膜、1 例に肋骨、大胸筋の合併切除を施行した。組織像は、小細胞癌 1 例、大細胞癌 3 例、低分化型腺癌 1 例、中分化型扁平上皮癌 1 例と、低分化傾向が著明であり、本症の特徴と考えられる。リンパ節転移については、検索しえた 5 例中 3 例に組織学的に縦隔リンパ節に陽性であつた。予後をみると、現在 5 ケ月生存中の 1 例と他病死の 1 例を除く 4 例が遠隔転移で死亡している。このことは本症が縦隔側肺末梢に発生し、診断ならびに早期発見が困難であり、かつ低分化癌が多く、またリンパ節転移、肋膜浸潤が著しく、早期に血行性転移をおこしてくることに基因すると考えられる。

以上縦隔型肺癌 6 例について報告するとともに、術後補助療法として、放射線療法ないしは抗癌剤の投与の必要性を強調する。